

ブラックアウト
米国の黒人による、
“民主党の新たな奴隷農場”からの解放宣言
キャンディス・オーウェンズ
サイモン & シュスター社（2020年）

書評：タダシ・ハマ（日本語訳：「史実を世界に発信する会」）

米国の政治コメンテーターであるキャンディス・オーウェンズは本書の中で、ブラック・アメリカンズの問題点について、自分の見解を詳細に述べている。オーウェンズには、処女作である本書を出版する前から、極めて多数の読者が付いていた。YouTubeの登録者が数十万人、ツイッターのフォロワーが数百万人にも達していたのである。そのうちのどのくらいの人々がオーウェンズの意見に同調していたかは不明であるが、その話を聞くだけでも、天性の力に恵まれた女性だということが分かるというものだ。彼女は冗談を交えず、熱のこもった言葉で、自分へのいわれなき批判をはねつける人である。現に議会のいわゆるヘイトクライムに関する公聴会には、黒人の保守派という立場でただ一人招致されることになった。公聴会では、険しい表情の台湾出身のテッド・リュウ（劉雲平）下院議員¹がまず彼女に厳しい非難を浴びせ、さらにはためらいがちなが、ナチズムの信奉者とまで中傷する出席者もいた。² オーウェンズは細部にはこだわらず、きっぱりとした態度で辛辣な反論を加えた。

オーウェンズは保守派を自認している——保守派のブラック・アメリカンという珍しい存在である。大手メディアの言うことなら何でも信じてしまう人々は、メディアの捏造した物語をオウム返しに繰り返し、保守派とは白人の資本主義者で、銃規制に反対するクリスチャンであると信じ込んでいる。さらに、従来の基準で考えてみると、米国の保守派は移民を受け入れることに反対するナショナリストであり、まさしく「排外主義者」とか「ファシスト」とかの定義がぴったり当てはまる。メディアの言うことはみんな正しいと信じ込んでいる人々がいるので、険しい表情の劉上院議員などはさしづめその代表であろう。彼らは米国はひどい国だと言ひ募る。保守派は恐ろしい連中だ。排外主義者が米国の民主主義にとって脅威になっている。こういう言い方が、いわば左翼版の「米国の民主主義」なのである。しかし、保守派を自認するブラック・アメリカンが出て来ると、

¹ 劉下院議員は、2025年に中華人民共和国を訪問した後、中国共産党は「米国と同じように、政治的に有害な知的所有権の侵害を避けたい（or 排除したい or 防止したい）と願っている」と「確信」していると語った。<https://www.dailydot.com/debug/china-cybercrime-cybersecurity-deal-ted-lieu-congress-interview/> この年のFBIのウェブページでは、中国共産党の米国におけるスパイ行為に関する記事を掲載しており、これを見れば、劉氏の主張は根底から覆される。<https://www.fbi.gov/investigate/counterintelligence/the-china-threat>

² <https://www.youtube.com/watch?v=4RZswuCGPwM>

憎悪の対象となり、嘲笑されるのである。この黒人はちょっとばかりメンヘラ³なのではあるまいか、というわけだ。

コメンテーターというものは、解りやすいことをはっきりと述べなければならぬことは言うまでもない——そして、オーウェンズは、自分にとって何が重要であるかをはっきりと丁寧に説明している。それは、真の民主主義である。言い換えれば、「自由と法の下での平等」に基づいた古典的民主主義⁴である。真の民主主義とは、「生存権、選挙権、言論の自由のような原理を追求する」ものだとオーウェンは主張する。そして翻って、こういう原理が「個人の自由に寛容な社会」を保証することになる。したがって、「自由」や「法の下での平等」が認められなければ、保守主義（つまり「真の」自由主義）は存在し得ない、したがって彼女はそのいずれも得ることができないだろう。

そこで、オーウェンにとっては、敵は左翼である。左翼の連中は、自由と「法の下での平等」を蔑視するからである——左翼は「『さらに高次元の道徳的な善を求める』という口実で、個人の自由を侵害してやまない」というわけだ。「道徳的な善は言うまでもなく主観的なものである」とであると指摘する。しかし、左翼にとっては、彼らの理想とする「道徳的な善」だけが問題なのである。この二年間のコロナ・パンデミックの間、ずっと冬眠し続けていた人でない限り、この保守と左翼の分裂を見逃すことはできないだろう。コロナの間、どの民主主義国家でも、左翼の官僚たちは、従順なメディアの支持を得て、ビジネスを閉鎖させ、マスクを付けろと強要し（後には二枚付けろとまで言い出した）、mRNA ワクチンを最高4回も接種させ、おまけに会合を開けば逮捕するぞ、などと途方もないことを言い出した。これが、左翼の「さらに高次元の道徳的な善を求める」政策の成れの果てであった。そればかりではなかった。国民の中には、このようなコロナ対策に科学的な疑念を抱き、また、良心に従って、道徳的に問題があるのではないかと反発する人もいた。これに対して、自由民主主義国家の官僚たちが型通りの弾圧を加え、犯罪者扱いをしたのだった。コロナ・パンデミックに対する自由民主主義国家の対応が社会経済学的な災害をもたらしたことについては、オーウェンは、本書の中では触れていないが、次に発表する著書では、それをしてくれるものと期待できる。

オーウェンは真の自由主義を信奉しているが、その一方で、「被害者の物語」を拒絶する。何かが起こるたびに表に出て来る、「私はこんな目に遭った」という、得体の知れない気まぐれな与太話のことである。たとえば、左翼のアピール

³ <https://news.yahoo.com/column-im-black-larry-elder-120059254.html>

⁴ 古典的リベラリズム（真の自由主義）はオーウェンズのワンセンテンスの要約で説明し切れるものではない。オーウェンズを思想を理解するためにも、また、「リベラリズム」という用語が正統派の学界やマルクス社会政治学のエリートたちによってどんなに歪曲されているかを見るためにも、<https://dwrightdmurphey.com/monographs/the-principles-of-classical-liberalism/>を参照して欲しい。

には、「ブラック・アメリカンズは、『構造的レイシズム』と『抑圧』のせいで『永遠に浮かび上がれない下層階級』の地位に落とされてしまった」という定番のお涙頂戴物語がある。また、今日の黒人は、160年前に終わった奴隷制度の「余韻効果」を今なお受忍しなければならなくなっているとも左翼は言うのである。そこから出てくるのは、現在の白人の責任問題である。白人は160年以上前の奴隷所有者の子孫なのだから、奴隷たちの痛みと苦しみに責任がある。当然補償をしなければならないという結論になる。⁵ オーウェンは、黒人が真に解放されるためには、自分の人生に責任を持たなければならないと信じている。いい加減に「被害者の物語」とは訣別しようというのである。なかなか鋭い指摘であり、米国のすべてのエスニック・グループに当てはまるアドバイスであろう。もはや存在していない過去を掘り返すのをやめて、未来のために建設的な提言をした方がよいことは言うまでもない。しかし、米国はもちろんのこと、少数民族の問題をかかえた他の国々でも、「被害者の物語」は頑強な雑草のように深く根を張っており、これを根絶するためには超人的な努力が必要になって来る。

オーウェンズは、ひたすら被害者を称賛してやまないのが左翼陣営だと指摘する。左翼という存在を擬人化すれば民主党になる。この民主党が、あることないことを材料にして黒人をそそのかす。黒人は永遠に白人に搾取され続けていると説得し、この「終わりなき下層階級」という境遇から逃れるためには、民主党に頼る以外に方法はないのだと刷り込む。民主党は左翼の理想を実現するための政治団体であり。民主党だけがブラック・アメリカンズを救うことができると喧伝する。⁶ これがオーウェンの論旨である。オーウェンによれば、民主党のいわゆる進歩的政策は、ブラック・アメリカンズを救い出すどころか、むしろ害するものだというのである。民主党は黒人とは永遠の被害者であると定義している。そんなふう決めつけられて、黒人はなぜ怒らないのか。そういうおためごかしを斥け、「民主党のプランテーション」から脱出し、自分たちの人生にもっと責任を持つべきだとオーウェンは言う。それができてこそはじめて、ブラック・ア

⁵ この荒唐無稽な理窟を受け入れようとするならば、重要な事実を忘れなければならないことになる。つまり、たいていの白人は、南部の白人を含めて、奴隷を所有していなかったという事実である。南部の白人のうち、奴隷を所有していたのは25%だった。(L. Scroggs, *The Uncivil War*, 2011) また、フランクリン・D・ルーズベルトの時代に発表された「Federal Writers Project of the Works Progress Administration, *Slave Narratives: A Folk History of Slavery in the United States from Interviews with Former Slaves*, 1941」という文書に記された、昔の米国の奴隷たちの生活の記録などは全く無視しなければならないことになる。

⁶ オーウェンズの説明はブラック・アメリカンズに限定されるものではない。日系人は、アメリカのマイノリティの中で、社会経済的に成功したグループとして知られるが、この人々でさえ、白人至上主義とフランクリン・ルーズベルトの政策の犠牲になったと抗議している。フランクリン・ルーズベルトの政策というのは、日系人の先祖が戦時中に西部から移動させられ、強制収容所に入れられたことを指している。被害者ぶるのはもう嫌だという賢明な日系人は、D・マーフィーの著書「*The Dispossession of the American Indian - And Other Key Issues in American History*, 1995」の中にある「The Relocation of the Japanese Americans During World II」をお読みになるようにお勧めする。<https://dwightdmurphey.com/essay-3-the-relocation-of-the-japanese-americans-during-world-war-ii/>

メリカンズは、現在の「終わりなき下層階級」という地位から上昇することができる。オーウェンはその考えを実行に移している。BLEXIT（ブレグジット）という運動を始めたのだ。BLEXITとはblackとexit（出口・出て行く）の合成語で、黒人が左翼のドグマを脱して、民主党と訣別し、保守的な原理を信奉するようにならなければいけないという運動である。

本書は非常に人を引き付けるところがあるが時々それが欠けることがある。オーウェンはネイティブ・アメリカンについて、齒に衣を着せない記述をしている。ヨーロッパ人がやって来るずっと以前には、インディアンは本当に野蛮で、食人の習慣があり、捉えた敵を奴隷にしたり拷問したりしていた。そのことにメディアは触れない。ネイティブ・アメリカンを刺激することを恐れるからだ。しかし、オーウェンは他と同じく断固として話を進める。かつては民主党がどんなに人種差別をしていたか。また、いわゆる内戦（南北戦争）が終結した時点では、共和党は黒人の救世主としてどんなに歓迎されたかを詳細に述べるのである。⁷ 現に、南北戦争後の復興の時代には、ラディカルな共和党员は、荒廃した南部で、黒人の民兵を使って、黒人や白人に対してテロを行った。その目的は、大体において、ビジネスの仲間たちで権力を掌握することだった。⁸ 本書の他の場所には、1800年代の民主党は、現在のオーウェンと同様に、実際に「真のリベラリズム」を信奉する政党だった、という記述がある。さらに、ラディカルな共和党员が、自己流の「さらに高次元の道徳的な善」⁹ を達成するために、南部人の権利を抑圧したという記述もある。

その一方で、オーウェンズは自分がブラック・アメリカンであることを、非常に誇りにしている。彼女は、ブラック・アフリカンの国々の生活水準が悲惨なものであることを重々承知している。だからこそ、レイシスト国家アメリカで、黒人が苦しんでいると訴える人々に苦言を呈する。このレイシスト国家アメリカに、有色人種がどんどん流入しており、しかも年を追って増えているという不可解な事実を指摘する。

被害者づらをした移民といえ、その代表が大坂なおみだ。袖やマスクに黒人差別に反対するアピールの文字を書き込んでいる。大坂はハイチと日本と米国の血

⁷ D・デスーザ「ヒラリーのアメリカ 2016」もまた、アブラハム・リンカン大統領が米国内の黒人をことごとくアフリカかハイチか中央アメリカに売り払ってしまえと言ったことを述べている。「米国でなければどこでもいい」とまで言ったとこと。 (T. DiLorenzo, *The Real Lincoln*, 2002)

⁸ L.M. スクラッグズ「*The Un-Civil War*, 2011」

⁹ オーウェンズはリンチの例を挙げている。共和党员が、いわゆる内戦（南北戦争）の後、黒人の共和党员に対してリンチを行ったというのである。政治評論家のドゥワイト・マーフィーは、左翼の情報源（or 情報提供者）に当たって、その証拠を発掘した。その証拠から分かったことは、白人も黒人も、男女を問わず、さまざまな状況下でリンチを受けたとのことだった。誰が誰に何をしたかということは、有能なジャーナリストでも、解明することはもう難しくなっている。
<https://dwrightdmurphey.com/monographs/lynching-history-and-analysis-a-legal-studies-monograph/>

が混じったテニス選手である。「2020年の東京オリンピックに出場する前に世界第2位にランクしていた。「ブラック・ライブズ・マター」の運動とジョージ・フロイドを支持しており、それを誇りにしている。ちなみに、オーウェンはこの運動とフロイドが大嫌いであるが、それももっともだと思われる点がある。もちろん、日本のメディアは、こういう話が大好きだ。そこで、大坂なおみを仲間として大歓迎している。大坂なおみは、東京オリンピックに日本代表として出場したが、さんざんな成績だった。その後のトーナメントでもさっぱりふるわない。すると、日本のメディアからたちまち冷たく扱われるようになってしまった。メディアは大坂の代わりに日系人を捜し始めたようだ。それでも、本人は、地下鉄の駅や車内の広告から、半分血のつながった日本人にほほえみかけている。オーウェンズはこういう事態をどう見ているのだろうか。